擬人法の名句 20句選

選＝山田真砂年［稲］

旅に病んで夢は枯野をかけめぐる　松尾 芭蕉

夢の擬人化。我が身は病の床だが、夢は野山を駆け巡っている。漂泊の思いは衰えない。

鎌倉を驚かしたる余寒あり　高濱 虚子

余寒の擬人化。歴史ある町鎌倉は、温暖だが谷戸も多く、時に厳しい余寒を感ずることも。

ぬくくと老いてねむれる田螺かな　原 石鼎

田螺の擬人化。水温むころ動き出す田螺。老人の如く、未だ泥の中でぬくぬく眠っている。

秋雨の瓦斯が飛びつく燐寸かな　中村 汀女

瓦斯の擬人化。炎が瓦斯に燃え移るというより、ガスの方から燐寸の炎に飛びついてくる。

わが行けば露とびかかる葛の花　橋本多佳子

露の擬人化。葛の葉が風に煽られて、露が着物に飛ぶ。葛の蔓延っている風景が見えるようだ。

海に出て木枯らし帰るところなし　山口 誓子

木枯らしの擬人化。一度海へ出たら陸には戻れない木枯らしは、特攻隊の比喩でもある。

囀をこぼさじと抱く大樹かな　星野 立子

大樹の擬人化。樹の枝枝で囀る小鳥たち。大樹の母性が小鳥たちを優しく包み込む。

冬菊のまとふはおのがひかりのみ　水原秋櫻子

冬菊の擬人化。一切の虚飾を脱ぎ捨て、己の発する光のみを恃む、静かな覚悟が見える。

満月に目をみひらいて花こぶし　飯田 龍太

花辛夷の擬人化。まん丸な月を眺める作者も、六弁の花辛夷も、目を大きく見開いているよう。

美しき死を邯鄲に教へらる　富安 風生

邯鄲の擬人化。「邯鄲の枕」の一炊の夢を想わせる。美しき死とは、欲望の虚しさを知ること。